列島保全への課題

わが国、国土への働きかけの歴史⑫

全国総合開発計画は五全総が最後に

社会資本の計画的整備ができない時代に

1998年（平成10年）に最後の全国総合開発計画となった「五全総」がまとめられた。背景には、地球環境問題への関心の高まりに加え、アジア諸国の台頭があった。アジア諸国との交流連携を考えずに、わが国の国土計画はなし得ないという認識の始まりである。同時に、概ね10年～15年後あたりを見通す全総計画の中で、五全総は計画期間内の将来に人口が減少し、少子高齢化社会を迎えることをはっきり認識しなければならない最初の計画となった。

95年（平成7年）には、生産年齢人口がピークを迎えたことが明らかになっていた。五全総の時代は生産年齢人口の減少だけでなく総人口も減少することがはっきりした時代であり、わが国が用意していた経済フレーム等が大きく変化する時代の序章でもあった。この頃から高度情報化時代といわれるようになった。

五全総のキーワードは「多軸型国土構造」と「連携社会」である。打ち出したイメージは、疲弊する中山間地域等を多自然居住地域として創造し、大都市空間をリノベーション（再構築）し、国土全体を多軸の国土軸といくつもの地域連携軸からなる地域連携のまとまりとして考え、ブロック圏を広域的な国際交流をそれぞれが担う広域国際交流圏としてとらえていこうというものだった。これを「二一世紀の国土のグランドデザイン」として提示したのだ。

交流から地域連携へ

四全総の「交流ネットワーク」は五全総の「地域連携」へと変化した。「交流と連携」というようによく並列で語られるが、二語の間には大きな違いがある。地域が連携するには主体としての自覚が不可欠なのに対し、交流にはそのニュアンスがないことだ。

人口減少時代には、A町とB町がそれぞれに図書館や体育施設などの住民サービスを用意することはできなくなる。フルセットで用意するのは無理だから、互いが役割を分担して連携しようとすると、地域の自然特性や歴史性などを考え、A町は何を受け持ち、何をB町に依存するかといった主体的な判断がなければならない。このように、「地域連携」は、地域の主体意識を促す時代を先取りした考えであった。

五全総の時代の2000年（平成12年）3月、四国の県庁所在地が高速道路で結ばれた。それまで4県の知事が会合するのに一番便利なのは空路で大阪に集まることといわれたが、そんな不便が解消した。この時期完成したものでは05年の中部国際空港が最大のトピックである。

開発から国土形成計画へ

全国総合開発計画は五全総が最後となった。開発などという時代ではないとか、地方分権時代に国の計画だけがあるのはおかしいなどと指摘され、全総が各種社会資本整備の計画的な支えの役割を果たしてきたことが、否定的にとらえられたのである。

全総は国土形成計画として引き継がれ、うち全国計画は08年（平成20年）7月に、広域地方計画は09年8月にそれぞれ決定された。

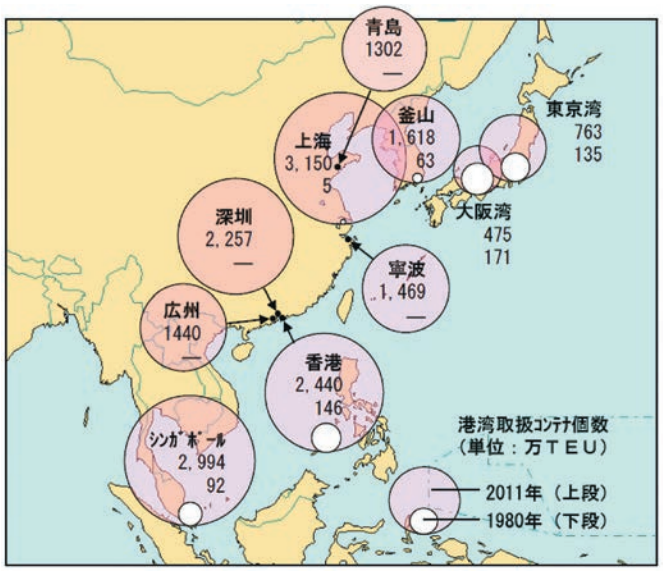
全国計画は15年（平成27年）8月に更新され、本計画では国土の基本構想として、それぞれの地域が個性を磨き、異なる個性を持つ各地域が連携することによりイノベーションの創出を促す「対流促進型国土」の形成を図ることとし、実現のための国土構造として「コンパクト＋ネットワーク」の形成を進めることとしている。

東アジアの台頭とわが国土の相対的劣化

社会資本の計画的整備（重点投資）ができなくなっていくのと並行して、東アジアでは国家集中ともいえるほどの重点投資を行うことで、国を代表する空港・港湾の整備とそれらを連結する高速道路等の整備が進んだ。日本とアジア各国の間に圧倒的な経済力の差があるうちは旧来の考え方でもアジア各国のインフラに劣後することはなかったが、中国や韓国などが経済力をつけて重点投資を続けたため、今日、空港・港湾などの整備では、中国や韓国に大きな差をつけられてしまった。

例えば、これだけの経済力がある国なのに、3500メートル級の滑走路が4本ある空港が一つもないとか、1000～2000万TEUのコンテナが取り扱える港湾がないといった状況に日本はなっている。いくつかの港湾が連携して国際競争に備えるという考え方もあってよいが、大水深港湾を持たなかったり、国内輸送と海外輸送を連携させる港湾・空港を持たないといったことは、わが国の経済的な競争力という点で極めて大きなハンディになりつつある。

東アジア主要港のコンテナ取扱量



出　典：Containerisation International Yearbook1982、Containerisation International September 2011、March 2012をもとに国土交通省港湾局作成

碑（いしぶみ）の記憶⑨

大海嘯記念碑

岩手県大船渡市末崎町

岩手県大船渡市末崎町中森泊里地区の麟祥寺に3基の津波石碑が建つ。記念碑と弔魂碑、慰霊塔で、明治三陸地震津波の教訓を伝える災害の記録のほか、慰霊塔には慶長年間から昭和までの津波の歴史を刻む。生々しい津波の猛威を今に伝える碑文を紹介する。

【海嘯記念碑】

恐ろしき大海嘯の我が三陸の海岸を襲いしは明治二十九年六月十五日旧暦五月五日の午後八時頃なりき。この日終日曇天、午後は殊に濃霧深く小雨さへ混じり夜は月なく陰闇の気物凄き程なり。折しも遠雷の響につれて怒濤澎湃。すはと言う間も何らせず萬雷地軸を挫いて我が村は数十尺の高浪に浸されたり。この日はあたかも端午の節句かつ田植の頃とて他へ嫁いでる者も帰り一家皆打揃う。此の危急の災害誰かは免るべき。親は子を夫は妻を助くる間なく相率いて失いぬ。浪は僅かに五分ばかりにて退けば樹は抜かれ家は流され、満目惨憺。後数日海底に沈みし死骸累々として現る。既に腐敗して性別のつかぬもあり。見も知らぬ他村のものあり。流失して影さへ留めぬもあり。かくて数うれば我が泊里の分、溺死261、各流失家屋57戸なり。ああ痛ましくも恐しいかな。（後略）

参考：国交省東北地方整備局道路部ホームページ「津波被害・津波石碑情報アーカイブ」

3基のうちの海嘯記念碑

国土と日本人
災害大国の生き方
大石久和著

本書では日本の国土の地形的・社会的特徴や国土への働きかけの歴史が明らかにされています。日本人は今、何を考えるべきか、に気づくことの出来る好著。
発行：中央公論新社
定価：882円（本体840円）